



Revisiting the Classic Studies

社会心理学 再入門

ブレイクスルーを生んだ12の研究

ジョアンヌ・R・スミス／S・アレクサンダー・ハスラム 編
樋口匡貴／藤島喜嗣 監訳

**社会心理学のいくつかの重要な研究が、
今も私たちの人間と社会の見方に
深い影響を与え続けている —**

どのような背景から生まれたか。研究者と実際の実験の様子は？
どう受け入れられ、どのような批判を受け、いかに継承されたのか？
社会心理学研究の影響と魅力を改めて発見する、再入門への誘い。

新曜社

 Revisiting the Classic Studies

社会心理学・再入門

ブレイクスルーを生んだ 12 の研究

ジョアンヌ・R・スミス／S・アレクサンダー・ハスラム 編
樋口匡貴／藤島喜嗣 監訳

新曜社

Social Psychology: Revisiting the Classic Studies

Edited by Joanne R. Smith & S. Alexander Haslam

Introduction and Editorial Arrangement © S. Alexander Haslam & Joanne R. Smith
2012

Chapter 1 © Steven J. Karau & Kipling D.
Williams 2012

Chapter 2 © Joanne R. Smith & Deborah J.
Terry 2012

Chapter 3 © Joel Cooper 2012

Chapter 4 © Dominic Abrams & John M.
Levine 2012

Chapter 5 © Jolanda Jetten & Matthew J.
Hornsey 2012

Chapter 6 © Robin Martin & Miles
Hewstone 2012

Chapter 7 © Stephen Reicher & S.
Alexander Haslam 2012

Chapter 8 © S. Alexander Haslam &
Stephen Reicher 2012

Chapter 9 © Michael J. Platow & John A.
Hunter 2012

Chapter 10 © Russell Spears & Sabine
Otten 2012

Chapter 11 © Craig McGarty 2012

Chapter 12 © Mark Levine 2012

First published 2012, All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.

心理学・再入門

シリーズ編者：S・アレクサンダー・ハスラム、アラン・M・スレーター、ジョアンヌ・R・スミス
エクセタ EX4 4QG、エクセタ大学心理学部

「心理学・再入門」シリーズは、心理学のなかでも鍵となる研究によって提起された問題について理解したいと思う学部学生や一般の方々のための新しいテキストである。各巻は12～15の章からなり、それぞれの章は、ある特定の古典的な研究について詳述し、その実証的、理論的影響について解説している。また各章では、その研究が行われて以来の思考と研究の進歩の重要な道筋についても議論されている。各章は、その展開の最先端の研究者によって書かれており、そのため各巻は教師にとっても学生にとっても、私たちが今日知っている心理学という分野を定めている中心となることがらについて多様な視点を探索する素晴らしい資料となっている。

シリーズの他の巻

『発達心理学・再入門——ブレイクスルーを生んだ14の研究』
(アラン・M・スレーター & ポール・C・クイン)

もし私がさらに少し遠くを見たとするなら、
それは巨人たちの肩の上に立ってのことです。

アイザック・ニュートンの科学上のライバル、
ロバート・フックへの手紙中の言葉（1676年2月5日）

目 次

■ はじめに ―― 社会心理学の古典から学ぶ

1

古典的研究の要素 2

古典的研究・再入門 6

各章の構成 8

本書の目的と構成 9

1 社会的促進と社会的手抜き トリプレットの競争研究・再入門

13

背景 13

社会心理学の夜明け 14

競争研究 16

トリプレットの研究の影響 26

結論 ―― 社会心理学へのトリプレットの遺産 27

2 態度と行動 ラビエールのホスピタリティ研究・再入門

33

背景 33

ホスピタリティ研究 35

方法と結果 36

ホスピタリティ研究の影響 38

ホスピタリティ研究を超えて 44

結論 47

3 認知的不協和 フェスティンガーの「世界の終わり」研究・再入門

53

背景 53

第一の不協和研究 ―― 『予言がはずれるとき』 56

『予言がはずれるとき』の影響 58

第二の不協和研究 ―― 強制承諾の心理 59

認知的不協和研究がもたらした影響 65

2つの古典的研究を超えて ―― 不協和の概念の発展 66

4 規範形成 シェリフの光点の自動運動研究・再入門	73
-------------------------------------	----

背景 73

自動運動効果（Autokinetic Illusion: AKI）研究 74

理論的意義 78

後続研究 81

自動運動効果研究を超えて——別の説明と知見 82

自動運動効果研究の影響 85

自動運動効果研究を超えて——規範形成への新しいアプローチ 87

結論 90

5 同調 アッシュの線分判断研究・再入門	97
--------------------------------	----

背景 97

線分判断実験 98

後続研究 100

線分判断研究の影響 103

アッシュの研究を超えて 104

結論 111

6 少数派の影響 モスコビッチの青－緑残像実験・再入門	117
---------------------------------------	-----

背景 117

青－緑残像研究 121

研究の影響 125

研究に対する批判——代替説明と方法論的問題 126

結論 131

7 服従 ミルグラムの衝撃的な実験・再入門	135
---------------------------------	-----

背景 135

スタンレー・ミルグラムの服従研究 137

アーレントとミルグラムがもたらした影響	139
服従に関する諸研究	140
服従研究を越えて	148
検証と影響	153
結論	156

8 暴政 ジンバルドーのスタンフォード監獄実験・再入門

161

背景	161
スタンフォード監獄実験	163
スタンフォード監獄実験の影響——特性主義への挑戦	170
スタンフォード監獄実験を越えて	
——状況主義への挑戦と相互作用主義の進歩	171
スタンフォード監獄実験への疑問	
——何が「自然」「新奇」「正常」だったのか	172
スタンフォード監獄実験を拡張する	
——社会的アイデンティティとリーダーシップの役割	175
結論	178

9 集団間関係と葛藤 シェリフのサマーキャンプ実験・再入門

183

背景	183
サマーキャンプ実験	185
サマーキャンプ実験の影響	192
サマーキャンプ実験への批判	194
サマーキャンプ実験を超えて	196
結論	198

10 差別 タジフェルによる最小条件集団実験・再入門

205

背景	205
最小条件集団研究	207
最小条件集団研究の影響	214
最小条件集団研究を超えて——批判と別の説明	215
結論	222

11 **ステレオタイプと偏見**
ハミルトンとギフォードの錯誤相関研究・再入門

229

背景 229

錯誤相関研究 230

錯誤相関研究の影響 235

錯誤相関研究を超えて——別の解釈と知見 236

結論 242

12 **緊急時の援助行動**
ラタネとダーリーの傍観者研究・再入門

247

背景 247

傍観者研究 249

傍観者効果を超えて 258

結論 262

訳者あとがき 267

人名索引 269

事項索引 273

装幀＝新曜社デザイン室

はじめに

— 社会心理学の古典から学ぶ

S・アレクサンダー・ハスラム、ジョアンヌ・R・スミス

19世紀の終わりに社会心理学が1つの学問分野として現れて以来、数多くの素晴らしい研究が行われてきた。しかしそのうちどれくらいの研究が、真の「古典」と呼べるだろうか。すぐわかるように、これは簡単で難しい問いである。簡単だとする理由は、何が古典的研究であるかについて、社会心理学者の中である程度の合意があるからである。難しいとする理由は、本書を編纂するにあたって、大きく限定しなければならなかったからである。実際、われわれは12の研究だけを取り上げた。以下の各章では、取り上げた研究をさらに精緻なものへと発展させた多くの研究について議論している。それでも、本書に取り上げた研究は、極めて限定されたものになっている。

したがって、ご想像の通り、各章で検討される研究は、いずれも社会心理学で非常に良く知られている。それらはほぼすべての入門書で（そして多くの専門書でも）取り上げられ、研究者、教員、学生にかかわらず、常識となっている。『心理学概説 (The Rough Guide to Psychology)』の著者、クリスチャン・ジャレットが述べているように、「他の諸科学には基本となる理論があるのに対して、…心理学の基礎は、理論ではなく、古典的な実験の集積によって打ち立てられている」(2008, p.756) のである。その主な理由の1つは、心と社会との関係に関する科学的な分析を提供する学問としての社会心理学の目標 (Asch, 1952; McDougall, 1910; Turner & Oakes, 1997) を、これらの研究が強力に語っているからである。その結果、古典的研究は、この研究領域が時間とともに発展していく中で何を研究するのかを定める重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、これらの研究を古典たらしめる本質の一部は、その詳細が社会心理学の内側だけでなく、その**外側**でも良く知られていることにある。他の学問領域（たとえば社会学、政治学、経済学、歴史学）の研究者に良く知られているだけでなく、ジャーナリストや評論家、政策立案者、その他関心のある一般の人びとにも良く知られているのである。この点で、これらの古典研究の主たる特徴は、読者をとらえる力にある。これは、これらの研究が知的好奇心を

喚起しただけでなく、音楽や芸術、演劇や映画など、われわれの文化に広範な影響を与えてきたことを意味する。したがって、これらの研究は、単に社会心理学だけに属するのではない。むしろ社会に（あるいは少なくとも西洋社会に）広く流布し、行動の日常的な理解を形成するうえで重要な役割を果たしてきた。セルジュ・モスコビッチ（Moscovici, 1984）の言葉を借りれば、理解の起点となり客観化するという意味で、つまり、現在においても対話や議論の具体的な参照点となっているという意味で、社会心理学の中核をなす**社会的表象**となったのである。

古典的研究の要素

パトリシア・デヴァインとアマンダ・ブロディッシュ（Devine & Brodish, 2003）が指摘したように、これらの古典的研究を知ることと、その理由を知ることとは異なる。さらに、ある研究がその地位に達したかどうかを決める一定の基準は存在しない。『アンナ・カレーニナ』の冒頭における不幸な家族の本質についてのトルストイの観察を当てはめれば、古典的研究にはそれぞれの古典の形がある。それでも、トルストイが幸福な家族について述べたように、社会心理学のほとんどの古典的研究が共有する特徴がいくつか存在する。

大きな問い

古典的研究の最大の特徴は、人の本質に関する基本的な問いを立てた点にある。なぜわれわれは同調したり服従したりするのか。なぜわれわれは攻撃したり支配したりするのか。なぜわれわれは助けたり支援したりするのか。このような、理解が求められているが容易には理解できない現実世界の出来事から、ほとんどの古典的研究がはじまっている。そして、これらの出来事のスケールの大きさが、答えを探索しようという研究者の野望をかきたててきた。

この点において、前世紀における第二次世界大戦とホロコーストほど、社会心理学者を世界に敏感にさせたものはない。それゆえ、多くの古典的研究が1945年以前に行われ、その後に行われた古典的研究の大部分も第二次世界大戦やホロコーストに（加害者としても犠牲者としても）関わった人びとの行動を理解するという願いに動機づけられており、また、それらの悲劇を実際に直接経験した研究者によって行われたことは驚きではない。これらの研究者たちは

表面的に現象を探ることに満足せず、誇りと偏見、恐怖と憎しみ、戦争と平和といった問題に力強く関わることを望んだ。そして、この強い動機づけの結果、彼らは時代精神を捉えた研究を行おうとしたし、それらの研究は画期的で興味深いだけでなく、力強く、圧倒的な説得力を持つこととなった。彼らの主眼は、注目せずにはいられない研究、安閑と無視することのできない研究を実施することにあった。

現代の社会心理学的研究は、ときに統計的洗練や方法論的細部にはまりこんでいる（イアン・ウォーカーの言う「非の打ち所のない枝葉末節」 Walker, 1997; Baumeister et al., 2007; Rozin, 2009 も参照）と批判されるが、上述のような理由で本書に取り上げた研究にはこの批判は当てはまらない。後続研究のほとんどは、未解決過程を科学的に正しいやり方で明らかにすることに関心を持つことになったが、むしろ古典的研究自体は方法論的、統計的な厳密さへの関心が極めて不十分であることが多かった。もちろん、今日の基準に照らして判断するのは妥当ではない（そしてそれはむしろ、肝心な点を見逃すことになる）。しかし、古典的研究の多くは実験の統制が不十分な単一研究であり、理論的背景、仮説、それらが明らかにした効果をもたらす内的プロセスに関する洞察も、限定的なものであった。いささか皮肉であるが、これらの研究のほとんどは、今日の主要な学術雑誌に受理されるのに、非常に苦勞するだろう（Diener, 2006; Haslam & McGarty, 2001）。しかし、この洗練の欠如こそが、これらの研究が長く影響力を保っているもう1つの特徴である。これらの研究の意味を理解するのに特別な訓練は不要だからである。

挑戦的な知見

だがこれらの古典的研究は、誰にとっても興味深く、理解しやすいだけではない。もう1つの重要な特徴は、われわれに既知なことを示したのではない点にある。それどころか、その知見はしばしば予想や直感に反しており、人間の本質に関して受け入れられている考えに対する挑戦であることも多い。たとえば、誰かの意見を変える際、小さいインセンティブよりも大きいインセンティブの方が有効だと多くの人は思うだろう。ところが、レオン・フェスティンガーとメルル・カールスミス（Festinger & Carlsmith, 1959）による認知不協和の研究によって、実際には逆であることが示された（3章参照）。同じように、人びとに自分の態度に沿った行動をするかと聞けば、おそらくほとんどの人が、一般的に主張と同じ行動をすると答えるだろう。ところがリチャード・ラビ

エール (LaPiere, 1934) はこの問題を体系的に調べ、人びとの態度と行動が大きくかけ離れていることを見出した (2章参照)。また別の例を見てみよう。スタンレー・ミルグラム (Milgram, 1963) は、学生や精神科医、一般の人びとに、死に至る可能性のある強烈な電気ショックを他者に与えるよう実験者が依頼したら、何割ぐらいの人がそれに応じるだろうかと尋ねた。典型的な回答は1%であった。実際には1%どころではなく、ミルグラムの権威への服従に関する古典的な研究の参加者の65%でこの破壊的な行動が観察されたのである (7章参照)。

このように、これらの研究はすべて、以降の研究における焦点や考え方に大きな変化をもたらした。これらの知見は強力だったので、以前支配的であったものの見方、理解のしかたに戻ることは困難であり、多くの場合不可能になった (McGarty & Haslam, 1997)。しかしながら、これらの特定のトピックに対する研究に**終止符を打った**わけではない。指摘したように、効果を再現し、いつそれが起こるのかを明らかにし、**なぜそれが起こるのか**を理解するためには、さらなる研究が常に必要である。実際、これらの研究が影響を与えたさらなる要素は、それらが新たな方向を示し、エキサイティングな研究を多く生み出したことにあった。したがって、これらの研究の成功は、科学的な不確実さを低減したり除去したりしたというよりも、科学コミュニティの諸分野が解決を目指して取り組む、新たな不確実さを**生み出した**ところにあった (Haslam & McGarty, 2001 参照)。この意味において、これらの古典的研究は、科学哲学者トーマス・クーン (Kuhn, 1962) が言うところの通常科学に属するというより、**科学革命**の一環をなすものである。

ハードルの高い方法

それぞれの研究が採用した方法もまた、古典的研究を古典たらしめている重要な側面である。社会心理学における他の研究と同様に巧妙で革新的なだけでなく、社会現象を研究するために、すでに確立されている生理的、視覚的な効果を用いることもあった (たとえば4章、6章を参照)。しかし何より、他のほとんどの研究と異なるのは、古典的研究は非常に現実的で、かつドラマチックなことである。これは多くの場合、訓練されたサクラ (すなわち研究者の仲間) を用いた、うまく作られ、考え抜かれた架空のストーリーによってもたらされる。通常、実験の参加者は、道徳的あるいは実際のジレンマを解決しなければならない苦境におかれる。たとえば、態度と行動との葛藤、自らの道

徳規範と状況的要求との葛藤、自分の現実の知覚と同席者からの影響との葛藤、公平でありたいという願いと所属集団を有利にしたいという願いとの葛藤などである (Devine & Brodish, 2003)。さらにこれらの方法は、その性質上、ドラマチックなイメージを形成し、しばしば動画として残り、学生たちへの強力で刺激的な資料となり (以降のページ参照)、研究プロセスの詳細についてさらに検討させることになった。特に、これらの動画は、見る者に、同じ状況で自分ならばどういう選択をしたらどうかと考えるよう促す。同席者に合わせて、自分の判断を変更するだろうか。死に至らせかねない電気ショックを与えるレバーを押すだろうか。もし監獄の看守だったら、囚人を虐待するだろうか。あなたなら？

そしてまた、重要なことと認識する必要があるのは、古典的研究は概して、実際の行動の説明と理解に焦点を当てていることである。質問紙への回答やコンピュータでの反応時間、さまざまな脳部位への血流量などではないのである (Baumeister et al., 2007)。後者もすべて興味深く、かつ科学の重要な側面ではある。しかし現実の状況において (たとえそれが人工的に作られた状況であったとしても)、現実に行動をとる現実の人間ほど、われわれの想像力を強力にかきたてるものはない。

道徳的、実際の苦境における行動を研究したいという願いは、さらにもう1つの結果をもたらした。古典的研究が、当然以上の**倫理的問題**を引き起こしたのである。実際、以下に議論する研究のうち2つ (ミルグラムおよびジンバルドによる研究。7章、8章参照) は、心理学的研究 (そして人間の参加者を用いた他の研究形態) の倫理的側面が考慮されるようになった出発点として必ず取り上げられる。また興味深いのは、こうした問題を克服することが難しいために、多くの古典的研究が今日、まったく同じ方法で実施されることがほとんどない点である。その1つの理由は、その倫理的困難を乗り越える**コスト** (時間と金銭の両方) が膨大だということにある。

もっと一般的に言っても、今日同じ研究をしようとしても、古典的研究の規模の研究をするには膨大なコストがかかり、非常に困難である。個人と集団との (特に長期にわたる) 相互作用の検討、サクラの雇用、実際の行動の測定と分析、新たなパラダイムを実行可能なものにするための予備的な作業、いずれも非常に高価につく。さらに、こういった研究を現在実施するのを困難にしているのは、何も金銭的な問題だけではない。このような研究プロジェクトに必要な時間投資を正当化するのは、より困難である。特に、雇用や昇進がしばしば主要学術雑誌における論文公開の数にもとづく世界、そして、すでに指摘し

たように、そうした学術雑誌が、未だ行われていない研究を貪欲に求める世界では、なおさらである (Baumeister et al., 2007; Devine & Brodish, 2003; Haslam & McGarty, 2001)。

結局のところ、独創的、ドラマチック、ハードルの高い方法は古典の要素ではあるが、われわれの考えでは、それだけでは十分ではない。そうではなく、最初に述べた観点をさらに発展させると、本書の研究を他の数多くの研究から際立たせているのは、意義ある社会心理学的問題に強力な方法で取り組む、その力にある。ポール・ロジンが述べたとおり、「優れた実験は世界の真実を捉えるが、その素晴らしさを決めるのはその優雅さではない。問題の選び方である」 (Rozin, 2009, p.439)。要するに、これらの研究について知ることは、社会の心理学的次元における何らかの本質を知ることなのである。

古典的研究・再入門

より良い問いをたてる

だが、大きな疑問、挑戦的な知見やハードルの高い方法だけが、古典的研究に共通する特徴ではない。本書に選ばれたすべての研究は男性によって行われたものであり（そしてほとんどが男性の参加者である）、またほとんどが、アメリカの一流大学（たとえばイエール、スタンフォード、コロンビア）で行われたものである。これらの特徴は、古典的研究が行われた時代（少なくとも 30 年前）の、この分野の性質を反映している。それはヨーロッパで強力な社会心理学が現れるよりも以前のことであり (Tajfel et al., 1981 参照)、女性の研究者や参加者が極めて少なかった時代であった。

些細なことのように見えるかもしれないが、人口統計学的変数におけるこの共通した特徴は、学生や古典研究の読者の目につくものである。これによる不幸な帰結の 1 つは、研究知見を解釈する際、人びとがある特定のタイプの疑問に、しかも最上とは言えない疑問に導かれてしまうことである。特に学生は一樣に、次のような質問をする。古典的研究を今日実施した場合には、同じ効果が得られるだろうか（過去の参加者よりも現在のわれわれの方がより同調せず、権威に対して疑問を抱き、偏見を持たないと考えられる）、（男性ではなく）女性参加者ならどうだろうか、他の国ならどうだろうか（アメリカ合衆国ではなく、たとえばオーストラリア、イギリス、中国ではどうか）。以降の多くの章が示している

ように、これらの疑問は、特に興味深いものではないことがわかる。それは、簡単に言えば、通常答えは「イエス」だからである。実際、本書で取り上げた古典的研究における核となる知見のほとんど（しかしすべてではない）は、さまざまな文化的背景からの多様な参加者によって、そして多くの異なる時代において、何度も再現されている。

それでは、いったい何がより良い問いなのだろうか。われわれの観点では、研究者が興味を持つ問題やその取り組み方に、人口統計学的変数やその他の広い文脈的な特徴が影響したかどうかを考えることの方が興味深い。たとえば上述したように、多くの古典研究がホロコーストをきっかけとして行われた。そしてホロコーストやその他の残虐行為の規模のゆえに、研究者は個人レベルでの解釈（たとえばパーソナリティなど）を避け、同調や服従、支配を促進する集団の力に焦点化した分析を探索することとなった。しかし、そういった研究は（理解できることではあるが）暴政のダイナミックスに焦点化したため、それに対抗する力を無視する傾向にあったのではないか。この問いは興味深い（たとえば5章～9章参照）。同様に、研究者は、偏見や緊急時に援助行動ができないといった社会問題に引きつけられてきたが、それは、これらが広範な社会問題を構成要素だと見なしたからである。しかしそれゆえに、これらの心的過程が過剰に蔓延し、必然であると強調されすぎることにならなかっただろうか。この問いも興味深い（10章～12章参照）。そして、研究に対する理解はどの時点で変化し（たとえば単純化や強調点の変化を通して）、その変化は何によってもたらされたのだろうか。なぜ研究に対する誤解や神話がいつまでも無くならないのだろうか。そうした誤解や神話はなぜその特定の形態をとるのだろうか。またこれらの俗説は、研究者がある特定の問いを立てるのを抑制し、有望な問題設定を閉ざしてしまうがゆえに、社会心理学の究極的な目標である心と社会との関係の理解にとって有害なのだろうか（Jarrett, 2008 参照）。

本書の各章では、基本的な問い（たとえば再現性に関わる問い）に答えることに加えて、古典研究が行われて以来、長年の研究によって引き起こされてきた、より挑戦的な問いにも焦点をあてている。そのために、それぞれの研究の詳細だけではなく、社会心理学領域への貢献についても、より高い水準で検討できるようにしている。この過程は、各章が同じ構造をなすことによって促進される。まずそれぞれの研究を丁寧に説明することから始め、その下に潜む本質を明らかにするように進んでいく。

各章の構成

すべての章は、まず研究を、それが行われた社会的・歴史的**文脈**の中に位置づけて、理解するところから始まる。研究者たちを動機づけた関心や、彼らの科学的思考を生み出した観点を取り出してゆく。次に研究の**方法と結果**が示される。ここでは一般的なテキストでは通常見落とされているが、検討された現象に対する重要な洞察を与えることがわかった詳細に注意が払われる（たとえば、実験者や特定の方法が特定の結果を生じさせたという証拠や、無視された変数が異なる結果を生じさせる証拠など）。

続いて研究の**影響**の考察に移り、そこではアイデアがどのように他の研究者によって取り上げられ、発展してきたのか、およびどのように社会心理学の領域やそのトピックに対する一般的な理解に影響したのかについて見ていく。ここでは、2つの頻出するテーマがある。第一は、すべての研究の影響が非常に大きかった一方で、しばしば研究者たちを予想外の方向へ導き、常に意図したかたちの影響をもたらしたわけではないという点である。第二は、従来、研究の説明がほとんど孫引きで（したがってそれによる人びとの理解も）しばしば非常に単純化されており、そのため研究の豊かさやニュアンスの重要な次元が明らかに捉えられていないという点である。ときには、そういった単純化が研究者自身によって推奨されることもあるが、大概の場合は大きなフラストレーションの種となる。

すべての章においてこれらのテーマを検討していくが、さらにその上で、その領域で古典的研究が行われたときから、それを**超えてどう動いてきたか**を考えて締めくくられる。ここでのキーポイント、そして本書の中心的な動機づけをなすのは、古典的研究が公刊されて後も、社会心理学の領域は静止してはいなかった、ということである。これまでに見てきたように、研究の鍵となる特徴の1つは、それが後続研究を生み出す触媒となってきたことにある。後続の研究は常に元の研究が提供した方法や洞察のうえになされるが、それが著者のオリジナルな主張を直接的に確証することは希である。それゆえに、すべての場合において研究の発展は必ず思考の何らかの修正を含むものとなり、いくつかの場合には、研究者の結論の核となる部分を揺さぶったのである。

本書の目的と構成

本書におけるわれわれの目的は二重にある。これまでも述べてきたように、また本のタイトルが示唆するように、古典研究に再入門して、第一に、古典研究が社会心理学の領域をどのように形成したのかを明らかにする。第二に、これらの古典研究によって提起された問題に関わることで、研究領域そのものがどのように変遷したかも明らかにする。表面的に、単なる標準的説明を再生産するのではなく、古典研究自体、およびそれらが探求したアイディアについての新たな視点を明らかにするために、古典研究を批判的に検討する。結果として、社会心理学の中核にある「聖典」の注意深い再検証を通じて、この分野がどのように興味深いものになっていきうるか——そしてなってきたか——を明らかにしたい。要するに、われわれは、これらの古典を尊重し、正しく扱いたいが、化石のように扱ったり、執着したりはしない。

これら古典の神聖さやそれを取り巻く神秘的雰囲気を考えると、これは容易な作業ではないし、単独でなせるものでもない。したがって、本書の計画段階において、まずなすべきことは、本書のようなプロジェクトが可能であり、追求する価値があるということをその仕事で示しているような共同執筆者を集めることであった。これは結果的に、当初考えていたよりもはるかに簡単だった。それは主として、われわれが依頼した研究者のすべてが、本書の目的と非常に近い研究プログラムに膨大な時間を割いてきた第一人者であったからである。幸運なことに、全員が参加を承諾し、さらに熱意をもって執筆してくれた。

結果的に、彼らの経歴や執筆章の内容が証明するように、すべての著者が、その章で紹介された古典研究が道を開いた研究領域の最先端で研究している世界的に著名な学者である。彼らの研究自体が、彼らの担当章の研究や研究者に対する深い理解によって非常に大きな影響を受けているが、それはまた、新たな心躍る方向へと研究領域を動かしてもきた。この点において、全員がアイザック・ニュートンの（シャルトルのベルナール^{〔訳注〕}を引き継いだ）有名な金言を体現している。この金言をわれわれは、本書全体を表現する巻頭句として掲げた。すなわち、これらの著者たちは他者よりもより遠くを見ることができたが、それは彼らが巨人の肩の上に立っていたからである。

〔訳注〕 12世紀フランスの哲学者。

各章の執筆に際しては、執筆者たちに、前節で概観した構造とアウトラインを厳守するように、そして（多様なレベルの）心理学を学ぶ学生だけではなく、これらの研究が語る重要な問題に興味を持つ、すべての読者に理解可能な記述をするよう求めた。ここでも幸運なことに、すべてがそのとおりになった。各章は読者に社会心理学の基礎に対する深い洞察を与えるだけでなく、これらの研究が行われてから現在に至るまで、その学問領域においてどのような重要な進歩があったのかについても示すものとなった。また通常、本の序章では続く各章の要約が紹介されるが、本書の場合、それは必要としなかった。なぜなら各章は非常に明快に書かれており、それぞれの章がどのように本全体の目的や野心的試みを達成しているか、補足説明の必要がなかったからである。批判的に見ても、彼らは、社会心理学が停滞しているのではなく活力ある学問領域であると示すような、現状では最強の事例を提供している。そして、それらは印象的な歴史的基盤を元に、創造的で洞察的なやり方で構築されている。

本書の各章を構成するにあたっては、この進歩の一貫した意味を与えるよう、全体的構造を持たせることを目指した。多くの古典研究は先行する他研究の上になされるので、それぞれの研究の刊行年を年代順に並べたかたちで章を構成することがもっともわかりやすい方法であった。図 0.1 に示したとおり、大体の研究はこの年代順に並べられている。それでも、この原則はいくつかの箇所では当てはまらない。章間の論理的な流れを重視したからである。

結果的に各章の順序は、私たちが過去 6 年間行ってきた「社会心理学の古典的研究」コースを教える中で見出した、最適な順序と同じとなった。最後に、コースの教科書として本書の完成を待ちわびてくれた学生たち、そしてこの目標を達成するのに多大な労力を割いてくださった執筆者の方々に感謝する。編者として、われわれはこの共同作業を大いに楽しんだし、非常に多くのことを学んだ有意義な経験であった。これは読者にとっても同様であると信じている。

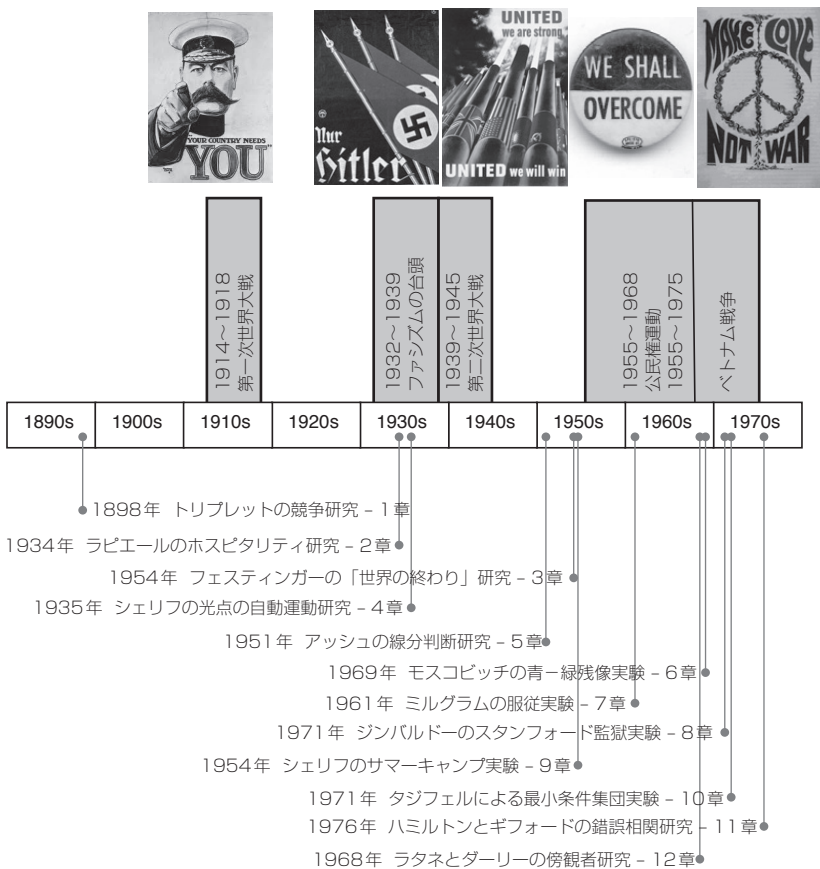


図 0.1 社会心理学における古典的研究の時間関係